

リットリットの婚姻

"The Marriage of Lit-Lit"

翻訳：高城 琴音

ジョン・フォックスが足を踏み入れた国は、一年の大半はウイスキーさえ凍り付き、ペーパーウエイト代わりに使ってしまうようなところだった。より繊細な育ちの冒険家たちは、理想や幻想によってその成長を妨げられるのが常だが、彼はそうした理想の類をもち合わせていなかった。アメリカの辺境地域で生まれ育った彼は、原始的なイメージや基本的で簡単な認識を携えてカナダに踏み入った。だからこそ、新しい仕事での成功が保証されたともいえる。ハドソン・ベイ・カンパニーのいち社員として、はじめのうちの仕事は旅行者とともに權を操り、荷物を背負って連水陸路を渡ることだった。しかし、ほどなく昇進して仲買業務を請け負うようになり、アンジェラス要塞の交易所の管理を任された。

根っから単純なフォックスは、カナダの先住民を妻に迎えた。不安やどうしようもない憧れなんかを抱いたせいでも、厳格な男たちの人生に禍は降りかかるし、仕事は台無しになるし、しまいには男たち自身がだめになってしまうものだ。しかし幸せな結婚生活の効用で、フォックスは不安や憧れとは無縁だった。満足な暮らしを送り、この地での仕事に唯一のやりがいを見出し、会社では素晴らしい業績を上げた。しかし、その矢先に妻を喪った。彼女の亡骸は親類の手によって運ばれ、ブリキの入れ物に入れて木の梢に掲げるといふ粗野な方法で弔われた。

夫婦の間には二人の息子があつた。会社での昇進を受けたフォックスは息子たちと広大な北西部の地域に入り込み、シン・ロックという地を目指した。そこで任されることになるのは、会社での重要性の高い、毛皮部門の役職だ。シン・ロックでの数か月間の暮らしは寂しくて気がふさぐものだった。見た目のパツとしない先住民の少女たちと鉢合わせるのに辟易したし、母親の手を必要とするようになった息子たちのことも気がかりだった。彼がリットリットにふと目を留めたのは、そんな時だ。

「リットリット：ああ、こちらがリットリットだ」フォックスはぞんざいな口調で、主幹事務のアレクサンダー・マクリーンを紹介した。

マクリーンはスコットランドの学校を出たばかりで「耳の後ろもまだ乾かぬうち」とフォックスは言ったものだが―辺境の地ならではの結婚の風習を受け入れるには早すぎた。にもかかわらずマクリーンは、仲買人フォックスの心が揺らいでいることに反対はしなかった。とりわけ、自分もリットリットに対して不吉な愛情を抱いていることに気づいたマクリーンは、彼女とフォックスとの結婚を見ることによって、自分の魂の安寧を確固たるものにするに甘んじた。

マクリーンの厳格なスコットランド的魂が、リットリットのまなざしの温かさによって雪解けの危機にさらされているのは当然ともいえた。彼女はかわいらしく、細身ですらりと

しているのだ。そこらの先住民のような大きな顔や鈍重な気質とは無縁だった。子どものように、軽やかで、蝶のようにあちらこちらへ舞い、移り気で、陽気で、走り回ったり踊りまわったりしているときのように軽やかに笑う。リットリットとはこういうところから来た呼び名だった。

リットリットは、部族中で有名な首長・スネティシエインと混血の母との間に生まれた娘だ。ある夏の日、仲買人フォックスは、軽い調子でスネティシエインに娘との結婚交渉をもちかけた。蚊やりが煙るテント小屋の前で首長と腰を下ろし、太陽のもとであらゆることを語った。少なくとも、ノースランドで陽光の下にあることは全て。ただし、結婚の話は唯一の例外だったが。

しかしジョン・フォックスは、結婚の話をするためにわざわざ足を運んだのだ。スネティシエインはそれをちゃんと理解していたし、フォックスは理解されていることを理解していた。だからこそ、その話題は細心の注意のもとに避けられていたのだ。これは先住民ならではの巧妙さによるものだと言われている。実際のところは率直な単純さによるものなのだが。

時は流れるように過ぎ、フォックスとスネティシエインは延々と煙草をふかし続けた。たいていそう芝居じみた、誠実なまなざしをお互いに向けながら。夕方になり、マクレーンとその後輩のマクタヴィッシュュが通りがかり、まったく無関心といった様子で川の方へそぞろ歩いて行った。一時間経って彼らが川から戻ってくるころも、フォックスとスネティシエインは、会社が取引している火薬やベーコンの品質や状態について仰々しい議論を交わしていた。

そのころ、リットリットはフォックスの用向きを察し、テント小屋の裏手の壁の下から中に潜りこみ、正面の垂れ幕越しに蚊やりの傍の人の論客をこっそり覗いていた。彼女の頬は色づき、目には喜色が浮かんでいたし、フォックスほどの男が自分を選んだということ誇りに思っていた。(というのも仲買人というのはノースランドのヒエラルキーの中では神に次ぐ存在だったからだ。)それに、どんな男なのかもっと近くで見たいという女性らしい好奇心も抱いていた。氷に反射した眩い陽光や、野営の煙、厳しい気候といったものが、男の顔を銅茶色に染めあげていた。父スネティシエインの肌も似たようなものだったが、彼女自身は心人よりも色白だった。彼女は遠くからこうした様子を見て取って喜び、さらに彼が大柄で頑健であることに気づくや否や、その喜びはいや増した。不思議なことに、立派な黒ひげには半ば怖がらされたが。

まだ年若いリットリットは、男性について無知だった。太陽が南に動いて地平線の向こうに姿を消してしまうのは「回しか見たことがなかったし、太陽が戻ってきて日がな一日天にあり、夜がなくなってしまうのも「回しか見たことがなかった。こんな娘を、父はここ数年用心に用心を重ねて大切に育ててきた。娘と求婚者の仲介役として、ある時は娘を求めて競り合う年若い狩人連中の話を軽蔑しながら聞いたり、またある時は娘をそんな端金で買えるわけがないと言って連中を追い払ったりした。貪欲なスネティシエインにとって、娘

のリットリットは資本だった。娘さえいれば、ある程度の固定利子どころか、計り知れない利子を受け取れる。父はそう期待していた。

間違はなく自分との結婚を求めてやって来た男。人生の未知なるものすべてを自分に教えようとする夫。その言葉が自分の法になるであろう堂々たる存在。残りの人生ずっと自分の行動と立ち居振る舞いを縛り付けるであろう人物。こうした相手の姿を覗き見ること。それは、部族の掟が許す限り尼僧院でのそれに近い育ち方をしたリットリットにとって、大きく、そして娘らしい不安を感じることもあった。

訪れつつある不思議な運命に顔を赤らめ、打ち震えながらテント小屋の正面の垂れ幕越しに様子をうかがうリットリットだったが、時がたつにつれ落胆の色が濃くなった。二人は結婚に関することはちっとも話しておらず、他のことばかり熱心に話し込んでいるのだ。太陽が北の方へと次第にその位置を低くし、夜が訪れると、仲買人は明らかに辞去の準備を始めた。背を向けて大股で歩き去る彼の姿に、リットリットの心は沈んだ。ところが彼がふと足を止め、こちらへ半身を向けたのを認めると、心はもう一度浮かび上がった。

「ああ、ところでスネティシエイン」彼は口を開いた。「水仕事や繕い物をやってくれる女がひとり欲しいんだが」

スネティシエインは乱暴な口調で、ワニダニはどうかと提案した。歯のない老女である。仲買人は遮った。

「いや、そうじゃない。私が欲しいのは妻だよ。前々からちよつとは考えていたんだが。誰かちよつどいい人はいないか、あなたなら知っているかもと閃いてね」

スネティシエインが興味深そうに見ると、仲買人はさっきまでいた場所へと再び歩を進めた。そして気軽な調子で、この新しく重要な話題について時間をかけた議論を始めた。

「カットウはどうだ？」

「彼女は隻眼じゃないか」

「ラスカは？」

「まっすぐ立ったときに膝と膝が広く離れているだろう？あなたのところのキップスほど大きい犬が通り抜けられるくらいにね」

「じゃあセナティは？」スネティシエインは冷静だった。

しかしジョン・フォックスは激怒したふうを装って叫んだ。

「なんて馬鹿げているんだ？老女と娶わせるほど私が老いているってか？私は歯抜けか？足が不自由か？盲目か？それとも私のことを好意的に見てくれる乙女の一人もいないくらい貧乏だったか？大概にしてくれ！仲買人だぞ！金もあるし名声もある、ここらでは権威だって。私の言葉で人々は震え上がるし、従いもするんだ！」

スネティシエインのスフィンクスのような表情が和らぐことはなかったが、彼はその仮面の下で密かに喜んでいた。彼は仲買人を引っ張ってきて地面に腰を下ろさせた。一度に一つの事柄しか考える余地をもたない単純な人間だったので、スネティシエインはその一つの事柄に関しては、ジョン・フォックスよりも長期的な策略を巡らすことができた。というの

も、ジョン・フォックスも単純な人間ではあったが、一時にいくつかの小難しい事柄を考慮することができたからだ。首長とは違って、一つの事柄に固執はしなかった。

スネティシエインは、適齢期の乙女たちの名を静かに挙げ続けた。数々の名前ができるだけ早く挙げられたが、それらはジョン・フォックスによってなにかしらの反論を添えられ、不適當だとの烙印を押された。フォックスは諦め、交易所に戻ろうとし始めた。スネティシエインはそれを見ても引き留めようとはしなかったが、フォックスのほうがち止まった。「そうだ、今思い出したよ、二人してリットリットのことを忘れていたじゃないか。彼女、私に合うと思うかい？」

スネティシエインは内心の満面の笑みを陰気な顔で押し隠しながら、その提案を聞いた。こゝ来ればこつちのものだ。もしフォックスがほんの一步でも遠ざかっていたら、必然的にスネティシエインはリットリットの名前を出していただろう。だが…その一步は踏み出されることはなかった。

首長はリットリットとの相性に関して言葉を濁した。その白人男を、正しい順序に則った次の段階に進めるまでは。

「そうだ」仲買人はある企てを口にした。「相性を知りたければ、試しに結婚してみる方法しかないな」声はいよいよ大きくなる。「そうしたら結婚と引き換えに毛皮100枚とタバコ30ポンドをあげよう。いいタバコだよ」

全世界の毛皮とタバコをもつても、大事な娘と、娘がもたらす多方面での利益を手放すことには代えられない。スネティシエインは仕草でそう答えた。しかし、それなら何と引き換えならいいのか、と相手も迫ってくる。そこでスネティシエインは、毛皮500枚・銃10丁・タバコ50ポンド・緋色の布20枚・ラム酒10瓶・オルゴール、そして暖炉付きの家を得るための仲買人の厚意と斡旋が条件だ、と冷淡に伝えた。

それを聞いた仲買人が卒倒しそうになったのは明らかだった。その結果、毛布は200枚に譲歩してもらい、暖炉付きの家に關しては諦めてもらった。それでもインディアン娘と結婚する白人男の条件としては前代未聞だったが、最終的に、 ∞ 時間に及ぶ値切り交渉の結果、 ∞ 人は合意に達した。スネティシエインが娘をだしにして得ることになったのは、仲買人の厚意と斡旋を加味して、毛皮100枚・タバコ30ポンド・銃 ∞ 丁・ラム酒1瓶だった。ジョン・フォックスに言わせれば、彼女の本来の価値に毛皮10枚と銃1丁ぶん上乗せしたものであった。ちょうど ∞ 時の日差しがびったり北東に差すような深夜に家路についたフォックスは、契約締結に際してうまく出し抜かれたことに不本意ながら気づいたのだった。

勝者たるスネティシエインは疲れ切って横になろうとしていたが、テント小屋から抜け出そうとする娘を見とがめ、訳知り顔に小言をのたまった。

「おまえ、見てたな。話も聞こえていたろう。なら、おまえの父親がどれほど賢く理解力があるかわかったはずだ。おまえのために大討論をしてやったんだ。俺の言葉をよく心に留めて、俺の言葉通りに歩め。俺が行けと言ったら行って、来いと命令したら来るんだ。そうして独活の大木みたいなあのかい白人の富で豊かになろうじゃないか」

翌日、交易所ではいかなる取引も行われなかった。仲買人は、喜ぶマクリーンやマクタヴ・イツシュに応じて朝食前からウイスキーを開け、犬にはいつもの倍のエサをやり、上等のモカシンの靴を履いた。交易所の外では、ポトラッチの準備が目下進行中だった。ポトラッチとは「贈与」を意味する。ジョン・フォックスとしては、リットリットの美しさに見合うような惜しみない贈与によって、彼女との結婚を示そうという腹積もりだった。午後になると、御馳走目当てに部族じゅうが大集結し、男も女も子どもも、犬までもが腹いっぱいになるまで食べた。他の部族の流しの狩人や、たまたま来ていた訪問者だって、一人残らず新郎の気前の良い贈り物の証を受け取った。

ひげもじゃの夫の手で着飾らされたリットリットはというと、涙ぐむほど怖気づいていた。真新しいキヤラコのドレス、華麗な玉飾りのついたモカシンの靴、ぬばたまの髪には豪華なシルクのハンカチ、首元には紫のスカーフ、他にも真鍮のイヤリングと指輪、パイントの安っぽい宝石、ウォーターベリーの時計。スネティシエインはその壮麗さに、ほとんど自制することができなかったが、機会を見計らって娘を宴席から連れ出した。

「今夜でも、明日の夜でもないぞ」彼は重々しく言った。「だが来たるべき夜、俺は川岸でワタリガラスのような呼び声をあげる。それが合図だ。そうしたらお前は、あのでかぶつの愚かな旦那のところから起き上がり、俺のところに来い」

娘が素晴らしい新生活に背を向けることに狼狽しているのを見て取った父は、性急に言葉継いだ。

「いやいや、こうすれば、たちまちおまえの旦那は嘆きながらうちにやってくることだろう。それからおまえもおんなじに嘆くだろう。これがよくない、あれが気に入らない、仲買人の妻になるのは交わした契約には見合わないと思痴ってな。おまえは、毛皮とタバコとその他もろもろの富をもうちとばかし、貧しく老いたお父様に分けてほしいと言っただけだ。いいか、よく覚えておくんだぞ。夜中に、ワタリガラスのごとく、川岸から呼ぶからな」

リットリットは頷いた。父に背くのは危険だとよくわかっていた。それに、父の頼みはちよつとしたことで、夫からわずかな時間離ればよいだけだったからだ。一度離れることで、彼は自分が戻るのをよけいに喜んでくれるだろう。彼女はそう考え、宴席に戻った。真夜中近くなり、フォックスは宴席の中から妻を探し出し、主に先住民の女性陣による冷やかしゃ抗議の声のなか交易所へと彼女を連れて行った。

交易所のトップとの結婚生活が夢見ていたもの以上だということにリットリットが気づくまで、時間はかからなかった。木切れや水を取ってくる必要も、気難しい男たちの世話をする必要もなかった。生まれて初めて、テーブルに朝食が並ぶまで寝ていられたのだ。そう、ベッドの素晴らしさときたら！清潔でふかふかで、初めて知る心地よさだった。そして食べ物！小麦粉はビスケットになったり、ホットケーキやパンになったり。来る日も来る日も、日に心度、食べたいだけ食べられる！こんな贅沢な生活は信じられなかった。

暮らしの満足さに加えて、夫は巧妙なまでに親切だった。彼には前妻に先立たれた過去があったし、手綱を緩めたまま馬を走らせる方法も知っていた。手綱を引くのはとても稀な

ことで、そういう時にはしっかりと引き締めた。「リットリットはこの女主人だ」結婚式の翌日、朝食の席で彼は重々しく告げた。「彼女の言うとおりに。いいね？」マクリーンとマクタヴィッツシュは首肯した。仲買人が強い力を有していることも、彼らはわかっていたのだ。

しかしリットリットは、女主人たる立場を利用しなかった。夫のやり方を見習いながらも、義理の息子たちへの世話をすぐさま引き受けたし、夫から彼女自身ももらったのと同様に、心地よい自由な暮らしを息子たちに与えた。人の息子は新しい母親のことを声高に褒めたたえた。マクリーンとマクタヴィッツシュがそのことをフォックスに伝えると、彼は結婚の喜びを鼻高々で語った。妻の良い行いと、それに自分がどんなに満足しているかという話が、シン・ロック地区の住人みんなの共通認識になるまで。

その時スネティシェインはというと、計り知れない利益のことを想像しては眠れぬ夜を過ごし、今こそ行動を起こす好機だと考えていた。

結婚生活二〇日目の晩のことだった。ワタリガラスの鳴き声で眠りから覚めたリットリットは、父が川岸で待っていることを悟った。幸せのさなかにあった彼女は、父との約束を忘れてしまっていたが、今や父に対して子供のころから感じていた恐怖とともに、約束した記憶がよみがえった。父のもとに行くのも嫌で、ここに留まるのも不安で、しばらく恐怖に震えながら横たわっていた。しかし、静かに軍配が上がったのはフォックスの方だった。夫の親切さ、立派な筋肉と角ばった顎とが、父の呼び声を無視する勇気を妻に与えたのだ。

夜が明け、大きな不安を抱いて起き上がったリットリットは、今にも父がやってくるのではないかと怖れつつも家事をこなした。しかし時が過ぎるにつれ、彼女は平静を取り戻し始めた。夫がマクリーンとマクタヴィッツシュの些細な怠慢を叱責している様子を見て、妻はなんとか勇気を奮い起こした。夫を自分の視界に常に入れておかねば。リットリットは腐心した。巨大な貯蔵庫の中までついていき、夫が大きな俵を羽毛入りの枕のごとく軽々と回したり投げたりするのを目の当たりにし、そうして父への反抗心が強まったように思われた。また、(彼女が貯蔵庫に入るのは初めてだったし、シン・ロックは駐屯所にとっての主要な分配地点なので)ここに保管されている無尽蔵の富に仰天させられた。

目の前に広がる富。そして記憶の中にある父のあばら家の光景。全ての迷いが消えた。そして義理の息子のちょっとした言葉でついに心は決まった。「白人のパパはいいパパかしら？」息子にそう尋ねると、「パパは、ぼくが知ってるなかじゃ一等いいひとだよ」という答えが返ってきた。

その晩、またもやワタリガラスが鳴いた。その次の晩、鳴き声はもつとしつこくなった。そのせいで目覚めたフォックスは、しばらくひっきりなしに寝返りを打っていた。「くそ、カラスのやつめ」夫の言葉を聞いたリットリットは、毛布にくるまって静かに笑った。

空が白み始めた早朝、スネティシェインはのっそりと姿を見せた。ワニダニが朝食の支度をしていたが、彼は“先住民の飯”を拒否すると、その後には交易所で義理の息子に食って掛かった。珠のような娘をくれてやったんだから、毛皮もタバコも銃も―特に銃だが―も

つと寄越せ、というのが彼の論だった。娘の価値を誤魔化されたのだと主張し、論を通そうと足を運んだのだ。しかし仲買人のほうは、毛皮も、義父に割く真心も持ち合わせていなかった。そこでスネティシエインは、スリーフォークスで宣教師に会った時のことを話した。彼らは、この婚姻は天では許されないものであり、娘を取り戻すことこそが父の義務だと教えてくれたのだ。

「俺は今じゃ敬虔なクリスチャンだ。うちのリットリットには天国に行ってほしいのさ」これがスネティシエインの結論だった。

対する仲買人の返答は簡潔で要を得たものだった。義父に“天国の真逆の場所”に行つてしまえ、と言ったのだ。さらに首根っこ身にまとった毛皮のたるんだ部分をつかみ、入口からできるだけ遠くに追いやった。

しかし周囲をうろついた拳句に台所から入り込んだスネティシエインは、交易所の広いリビングにいたリットリットを追い詰め、怒りをあらわにした。

「昨日の晩は川岸から呼んだが、おまえはおおかた寝入っていたんだろな」

「起きていたし、聞こえてもいたわ」そう返したとき、リットリットの胸はどきどきして、窒息してしまいそうなほどだったが、それでもしつかりと言葉を紡ぎつづけた。「その前の晩も起きて聞いていたわ。そのまた前の晩も」

大きな喜びと恐怖心とが糧になったのだろうか。そのとき彼女は、女性の権利と地位を求め、独創的で熱烈な演説を始めたのだ。それは、北緯55度でなされた最初の新しい女性の演説でもあった。

しかし、父は聞く耳をもたなかった。スネティシエインは古臭い時代に固執しているのだ。息を継ごうとした娘の言葉が途切れたときだった。「今夜、またカラスの鳴きまねをしてみせるからな」その言葉は脅迫めいていた。

ちようどそのタイミングでフォックスが部屋にやってきて、義父が“天国の真逆の場所”に向かう手助けをした。

その晩、ワタリガラスは以前にもましてしつこく鳴いた。眠りの浅いリットリットはそれを聞いて笑みを浮かべた。ジョン・フォックスはひっきりなしに寝返りを打っている。眠りから覚まされると、寝返りの頻度は一層多くなった。小ささまざまな声で悪態をつき、ついにはベッドから跳ね起きたかと思うと、手探りで広いリビングへと向かい、棚から装填済みの銃を手を取った。鳥撃ち用の弾が入ったそのショットガンは、マクタヴィッシュの不注意でそこに残されていたものだった。

フォックスは物音を立てずに要塞から出ると、川へと向かった。鳴き声は止んだが、丈の高い草むらに身を横たえ、機を待った。空気は冷え冷えとした香油のようで、日中の熱気が去った地面は時たま彼をなだめるかのように呼吸した。彼はそうした律動を体で感じながらうとうとし始め、腕を枕にして眠り込んでしまった。

そこから50ヤード離れたところでは、抱えた膝の上に頭を乗せ、ジョン・フォックスに背を向けてスネティシエインもまた眠っていた。夜のしじまにそっと侵食されて。一時間が

過ぎて目覚めた彼は、頭をもたげることなく、しゃがれたカラスの鳴き声で夜を震わせた。

フォックスは起き上がった。教養ある男ならではのぎこちない動きではなく、野蠻人が眠りから覚醒へと移行するかのような素早い動きだった。夜の光のもと、照準のなかほどに暗い物体を視認し、それに銃口を向けた。二度目の鳴き声が響くと、彼は引き金を引いた。繰り返し歌っていたコオロギたちは静まりかえり、獐鳥はけんかをやめ、カラスの鳴き声は途切れて、息をのむ静けさのなかへ消えていった。

ジョン・フォックスは自分が殺したものを見ようと駆け寄った。しかし彼の指が捉えようとしたのは硬いもじゃもじゃ頭で、星の光のほうへと向きを変えて現れたものはスネティシェインの顔だった。ショットガンが50ヤード地点でどんな風に散り散りになったのか、フォックスは悟った。それから、スネティシェインの両肩から腰のくびれた部分にかけて銃弾を浴びせかけたことも。スネティシェインもまた、彼が悟ったことに気づきはしたが、口には出さなかった。

「どうしてあなたがここに？ご老体は寝ている時間でしょくに」フォックスは尋ねた。

スネティシェインは、その皮膚の下で鳥撃ちの弾がはじけたとは思えぬほど堂々としていた。「老骨は眠らない」厳かに言った。「娘を思って泣くのさ。わが娘リットリット。生きながら死人になる娘。必ずや白人連中の地獄に落ちる娘さ」

「それなら遠くの川岸で泣いちゃくれないか。こちらに声の届かない場所で」ジョン・フォックスはそう言って踵を返した。「嘆きのうるささと言ったら度を超えているし、おちおち眠れやしない」

「心が痛むよ。昼も夜も悲しみで真っ黒だ」

「カラスが真っ黒なようにね」ジョン・フォックスが言った。

「カラスが真っ黒なようにさ」スネティシェインも言った。

それ以来、川岸でカラスの声がすることはなくなった。リットリットは目を追うごとに貫禄を増し、とても幸せな生活を送っている。樹上に葬られたジョン・フォックスの前妻の息子たちには、妹ができた。老父スネティシェインが交易所を訪れることは二度とない。彼は覇気に欠ける年老いた声を張り上げ、たいていは恩知らずな子どもたちのことをなじって過ごしている。特にリットリットのことを。買い叩かれたという事実。リットリットには毛皮10枚と銃1丁ぶん余計に払ってしまったという主張をジョン・フォックスが撤回した事実。これらがスネティシェインの短い老い先に、怒りの炎をつけるのだった。